

1931/32年モスクワ改造コンペにおける ハンネス・マイヤー案とエルンスト・マイ案について

岩澤 龍彦

序

本論は1931/32年にソヴィエトで実施されたモスクワ改造コンペに応募した、2人の外国人建築家、ハンネス・マイヤー (Hannes Meyer, 1889-1954: 以下、「マイヤー」) とエルンスト・マイ (Ernst May, 1886-1970: 以下、「マイ」)、それぞれの案を比較検討し、両者の案の同異点と彼らの案とソヴィエト人の目に映るそれとの差異を指摘したい。

はじめにソヴィエトにおけるモスクワ改造コンペの位置づけを確認する (第1章)。モスクワは当時、都市として急激な成長を為したが、その成長に都市のインフラは追いついておらず、都市問題が勃発していた。このモスクワの都市問題の解決を目的として招聘制のコンペが開かれ、マイヤーとマイが招聘された。

このようなコンペに招聘された両者の案はどのようなものであったのか (第2章)、その案を裏付ける理念とは何だったのか (第3章) を比較検討する。両者は規模の大きさは異なるが、共に都市建築あるいは集合住宅の経験を有する建築家であり、実施可能な案を提出していた。

両者の案に対してソヴィエト人はどのような反応をし、コンペの結果は怎么样了のか、さらにその反応をマイヤーとマイはどう受け止めたのか (第4章)、を述べ、結びとする。

第1章 「モスクワ改造コンペ」とは

はじめにモスクワ改造コンペがなぜ実施されるに至ったのかを概観する。1918年からソ連の首都となったモスクワは20年代を通して著しい成長を遂げていた。とりわけ30年前後の成長は目覚ましく、1930-33年の間でモスクワの人口は120万人増えた。しかし、モスクワのインフラはそれに見合うような発展はしなかった。居住環境は、1人当たりの住居面積は1929-1933年の間で25%減少し、急激な人口増加に対応すべく建てられたバラックは1人当たりの居住面積は2㎡というような状態で、劣悪であった。交通インフラもまた同様に、1913年から1930年の間に輸送件数はほぼ倍増したにもかかわらず、輸送距離は30%増加、輸送車の数は65%増加し、交通は常に滞り、地下鉄、高速道路の敷設は1923年に頓挫したままであった (D. Neutatz2006: 60-62、J. Gantner1933: 224)。

このような状態を「都市問題」として政治の俎上に載せたのがラザリー・カガノヴィチ (Лазарь Каганович, 1893-1991) であった。1930年にモスクワ地域政党委員会の第一書記、委員長に就任したカガノヴィチは、1931年6月の共産党中央委員会総会でモスクワの「都市問題」を指摘した (下斗米1994: 46-47)¹。そして、交通網の整備、地下鉄、モスクワ=ヴォルガ運河の建設を含めたプ

¹ 政治問題として都市問題が取り上げられるより前にすでに、ソヴィエトにおいては都市建築について、「都市派」

ログラムが議決され、1931年11月、より現実的なプランを求めて、招聘制のコンペが開かれた。

このコンペに招聘されたのが、ソヴィエト国内の4人・グループ、すなわち、ゲルマン・クラーション (ГерманКрасин: 1871-1947)、ニコライ・ラドフスキー (Николай Ладовский: 1881-1941)、ウラジミール・クラトユク班 (Бригаде Кратюка: Владимир Кратюк: 1899-1976)、VOPRA (ВОПРА) グループ、そして外国からは3グループ、ハンネス・マイヤー、エルンスト・マイ、クルト・マイヤー (Kurt Meyer: 1888-1942) であった。

招聘された外国人建築家はいずれも集合住宅ないしは都市の問題に取り組んだ経験を有する建築家であった。ハンネス・マイヤーであればバーゼルの生活協同組合のためのフライドルフ集合住宅 (岩澤2018)、マイであればプレスラウ、フランクフルトでの一連の集合住宅および都市建築、クルト・マイヤーであればケルンでの都市建築に従事していた²。

コンペに招聘された各外国人建築家の経歴を踏まえれば、ソヴィエト側が現実可能な案を求めていることは明らかである。さらに、カガノヴィチが大胆な案よりも堅実で、保守的な案を求めていることから、彼ら3人が招聘されたことは妥当であると考えられる³ (下斗米1994: 47)。

第2章 マイヤー案とマイ案

マイヤーとマイ、両者が提出した案はどのようなものだったのか。雑誌『ソヴィエト建築』の1933年第1号に掲載された各案のシェーマの図面分析から比較検討する (図1-7を参照)。

一見するとわかることはクラーションを除いた国内の案 (クラトユク班、ラドフスキー、VOPRA) はいずれも下地に描かれている河川や道路を度外視した幾何学的なグリッドに基づいて計画していることである。このこと背景にはこのモスクワ改造コンペ以前の1930年に出版されたミリューチンの著書、『社会主義都市 (Соцгород)』で論じられた計画原理としての線状シェーマ (схема основных полос диний) の影響があるだろう (Милучин2018: 24, T. Flierl2016)。

他方、外国人であるマイ、マイヤーの案からは政府の定めたプログラム内で重要な位置づけをされた河川や幹線道路に沿って、居住地区、産業地区 (斑点がかけられているゾーンが居住地区、網掛けが産業地区) が配置されていることが見て取れる。

このことは雑誌『新しい都市』に掲載された彼らの案のさらなる図版を見ても明らかだ (図

と「反都市派」とに分かれ、盛んに論じられていた (T. Flierl2016: 130, C. Schnaidt1974)。ソヴィエトにおける都市建築論の代表的な理論家がニコライ・ミリューチン (Николай Милучин, 1889-1942) であった。1930年に出版された彼の著書、『社会主義都市 (Соцгород)』はソヴィエト内でスターリンの方針との相異からソヴィエトの建築界におけるその効力は消滅された (D. Chmelniczki2008: v)。しかし、1931年にベルリンで開かれたプロレタリア建築展 (Proletarische Bauausstellung) において、それに掲載されている図版が展示されたほか、同展のプログラムで多く言及されるなど、ソヴィエトに対して好意的なドイツ人建築家には目に留まるものが多くあったのだろう (岩澤2019)。また、CIAMの第4回会議がモスクワで行われる予定であった (最終的には1932年にアテネで開催) ことなどを踏まえれば、西欧人にはソヴィエトの都市論は魅力的に映っていただろう (鈴木2017年)。

² 本論では、ほぼ同時期に渡ソした前二者を考察対象とする。クルト・マイヤーについては、前二者よりも前に渡ソしていたほか、APU (Объединение архитекторов-урбанистов: 都市建築家同盟) に参与し、モスクワのその後の都市計画の根幹に携わっていたことから、「コンペに招聘された外国人」とは異なるように思われる。そのため、本論では考察対象外した。

³ 1930年5月16日付けの『ブラヴダ』紙に掲載された中央人民委員会による声明でも同様の見解が示された。それによれば、註1内で述べられた都市派らの試みは過激で、ファンタジーのようなものでしかなかった (C. Schnaidt1974: 24)。

8-12)。これに加えてさらに、マイヤー、マイの両案からは一極集中を避けている傾向があることも見て取れる。

マイヤー案の「ラヨン再編のシェーマ」(図8)からは、居住地区と産業地区が交通軸線上に、すなわち、中心部を持ちながら放射状に分散されることによって、都市の機能の一極集中が避けられていることが見て取れる。マイヤーはそれによって、1人当たりの居住面積を十分に確保できるようにしていた(H. Meyer1938: 104)。また、交通軸線上に居住地区と産業地区を配置することで各地域間を容易に移動できるようにもなっている(同上: 108)。しかしその配置は東・南東部を中心に展開されていることから、適切な分散でないように見えるかもしれないが、産業のための原材料の供給が東・南東部から行われ、それと同時に、産業地区も東・南東部で成長した歴史があった措置であった(J. Gantner1933: 227)。

マイ案の「モスクワ都市集団の三段階の拡張シェーマ」(図10)、「都市集団における交通」(図11)からは、マイがモスクワの今後の発展を見込んで3段階の拡張を想定し、帯状の居住地区をハの字型のユニットとしてタイプ化し、交通軸線状を基軸として放射状にいわば画一的に展開していることが見て取れる。

このように両者の案からは、都市の中心部への一極集中を避け、交通軸線に沿って放射状に居住地区と産業地区を配置・展開していることが見て取れる。マイヤーの場合には産業の発展の歴史に基づいて東・南東部を中心にそれらが展開され、マイの場合には居住地区をユニットとしてタイプ化して交通軸線に沿って展開することで、より長期的かつ大規模な発展が想定されていた。

第3章 マイヤー案とマイ案の理念

両案をそれぞれ裏付ける理念とは何なのか。雑誌『新しい都市』(die neue stadt)の編集者であったJ・ガントナーによる本コンペの報告記事(J. Gantner1933)をもとに、マイヤー案では主に「大モスクワの展開・改造プラン」(1938年)と「都市建築における経験」(1939年)から、マイ案では「大モスクワのために新しい総合建設プラン」(1932年)から、各案の理念を明らかにする。

マイヤー案で見られた都市および居住地区と産業地区の拡張に際しては「サテライト・ラヨン(Satellitrayon)」システムという理念があった。ラヨンとはソヴィエトにおける行政区画の名称で、州の下位に属するものであり、1930年12月に「モスクワ」はラヨンになったのであるが、マイヤーが提案したのはその細分化であった。すなわち、マイヤーはそれぞれのラヨンに20-35万人が住む18のサテライト・ラヨンにモスクワを再編成することを提案した。サテライト・ラヨンの再編に際しては、幹線道路と高速鉄道に準じて細分化することでサテライト・ラヨン間の移動を容易にし、「都市と地方の差異が不明瞭にされ、止揚される(aufgehoben)」(H. Meyer1939: 222)ようにした⁴。この再編成に伴ってマイヤーはさらに、ウインタースポーツ施設や科学アカデミー、農業

⁴ この都市と地方との差異の解消は、ミリューチンがマルクスに依拠しながら『社会主義都市』でいく度も強調していたことであった(Милуочин1930: 14)。C・シュナイトは、モスクワ改造は社会主義生活制度、すなわち、集団化の具現化であり、その前提の一つに「都市と地方の間の矛盾の止揚」があったことを指摘している(C. Schnaidt1974: 24)。しかし、マイヤーが「止揚」(aufheben)という用語を用いているからといって、ミリューチンやマルクスのテキストに基づいての記述であると断言できないため、憶測の域を出ていない。そのため、注での言及に留めておく。

施設といったモスクワに点在する文化施設の各サテライト・ラヨン内への移設、モスクワ＝ヴォルガ運河建設に伴う休養に適した景観、大衆デモを考慮した配置（富田2008）によって、労働と休息とが一体となった社会主義的生活を実践するための「建築有機体」、弾力的な建築システムを提案した（H. Meyer???: 98）。

マイ案では、図面で明快に見て取れたようなある種のタイプ、すなわち、「社会主義の首都の本当の生き生きとしたタイプ」（E. May1932: 334）であり、「新しい社会主義的生活の自然な発展と拡張のための道を用意するシステム」（同上）、「都市集団（Das Stadt-Kollektiv）」（同上）というコンセプトがあった。この「都市集団」は、およそ10万人が居住する「居住コンビナート」、「産業コンビナート」、コンビナート間の緑地、文化施設からなる複数のユニットからなり、この総計が都市集団、都市モスクワとして規定されていた（同上: 332, J.Gantner1933: 227）。そして、この都市集団はモスクワの人口増加に準じて3段階の発展が想定された。この都市集団が3段階の発展を経ることで人々は、人口集中の回避と居住コンビナート、産業コンビナート、緑地の交通網に適した配置によって、劣悪な居住環境から解放され、「伝統的な都市形式におけるよりも健康的で合理的な存在」になり、「居住生活、労働生活、社会的生活はまさに完全な統一へと融解される」（E. May1933: 356）ことをマイは想定した。

マイヤー案、マイ案はいずれも今後整備されるはずの交通網に準じた都市の展開を想定していた。こうした拡張を通じて人口過密は解消され、産業地区と居住地区間の容易なアクセスと緑地帯や文化施設の適切な配置によって人々の健康的な生活が意図されていた。

しかし、マイ案においては「コンビナート」とそれからなるユニットというように複数のレベルでのタイプ化がなされ、それによって形成される都市集団の発展、すなわち、都市そのものの拡張が提案されていたのに対して、マイヤー案においてはモスクワという一つのラヨンを複数のラヨンに細分化し、サテライト・ラヨンシステムとしての再編成が提案されていた。

第4章 コンペの結果

本コンペの結果はどうであったのか、そして、このコンペでの経験は両者にとってどんな意味を持ったのだろうか。

1932年2月、本コンペを取りまとめる都市建築同盟（APY）が設置され、同年3月から8月にかけてモスクワ改造のための方針を定められた。その際、本コンペに提出された案はすべて効力をもたなかった。なぜならば、提出案における転換のありようはあまりにもラディカルで、非現実的であると見なされたからであったからだ（D. Neutatz2006:68-69）。1935年7月にスターリンに可決されたモスクワ改造総合プランでは、歴史的に形成された統一の保護、根本的な構造の維持、南西部、北西部、東部への居住地区の配置、南東部への産業地区の配置が示された。（同上: 70）

最終的な総合プランではマイヤー案とマイ案と共通するものがあるが、それらを非現実的と見なしたソヴィエト政府の見解は妥当なのだろうか。ソヴィエト政府の見解を否定はできないだろう。なぜならば、両案とも他のコンペ提出案に比しては現実的ではあったが、過去に頓挫したことのある大規模な交通整備、緑地敷設、産業の移設・再配置を大前提としており、マイヤーの場合には行政区分の再編成、マイの場合には居住地区のタイプ化に基づいた建て直しがあるように、多くの課題を残すものであったといえるからだ。

この一連のコンペの経験、およびコンペの結果に対して両者はどのように反応したのか。マイヤーはこのコンペでの経験を次のように述べる。

「私が1931年に大モスクワの小さなコンペの8つ〔筆者による訳注：7つ〕の班構想の一つとして招待されたとき、私の知識と経験が巨大な課題と比較した時、どれほど少ないのか、を私は未だに感じていなかった。なぜならば、私たちに西欧の都市建築が伝達した教えは全くもって本質とはかけ離れた斧であり、ソ連邦の社会システムにおいては不適當であったからである。私たちに全くもって不足していたことは弁証法的統一と、地球の6分の1のために首都を健全に、力強く、そして美しく発展させるこの巨大な課題を実際に実行できることへの信念である。一専門的な敗北は私にとって同時に、意義ある支えとなり、私の人生の中でもっとも深みのある体験となった。」(H. Meyer1939: 222、下線は筆者によるもの、以下同様)

マイヤーにとってこのコンペの経験は西欧とは異なった制度との差異という意味で意義あるものであった。そして、1935年に策定された総合プランについては次のように述べる。

「第二次五ヶ年計画の急速なテンポの中で、1935年に都市建築のあらゆる準備をとりまとめる「プラン・スターリン」(Plan Stalin)が生じた。(…)〔それは〕全世界に対してモスクワを都市建築として進歩的な首都にらしめたことを証明している。」(H. Meyer1938: 105-107)

総合プランについてもマイヤーは非常に肯定的に捉えていたことがわかる。マイヤーにとってその総合プランは、都市建築の領野においてソヴィエトの首都たるモスクワは世界に誇る進歩的な首都となったことを証明するに値するものであった。

他方で、マイはどうであったのか。マイはこのコンペでの経験を次のように述べる。

「〔モスクワ総合コンペに携わる仕事は〕きわめて意義ある課題であった。1925年のブレスラウのためのコンペ案の際に初めて中規模都市、あるいはその拡張のための概念を初めて打ち出したように、私は今やこの考えを数百万都市に転用した。」(E.May???: 127)

このことからマイが、かつて取り組んだブレスラウでの都市建築での試みをより大きな都市に転用できた点で意義ある課題と見なしていたことがわかる。そして、総合プランについては次のように述べる。

「私が思うに権力者は、古びた表象に代わって新しいコンセプトを提出し、人間の繁栄だけを目的とする私の提案をきわめて好意的に迎えたであろう。しかしこの場合においても私はふたたびある失望を体験した。人は、華美な建物と偉大な記念碑への視線で完結するモニュメンタルな通りの旧来のシステムを最終的に選ぶような決断を差し当たっては為しえないだろう。」(同上)

マイはこのコンペの結果に対して、旧来のシステムの存続を含んだ総合プランに失望した。この総合プランのモニュメント性は、この総合プランの策定と並行して行われたソヴィエト宮殿コンペ

でも明快にみられる傾向であった（本田2014: 149-166）。

総合プランに対するマイヤーとマイの反応は対照的であった。この反応の著しい差異は、マイが1934年の初めにソヴィエトを離れたのに対して、マイヤーは1936年5月まで滞在していたことにも現れているといえるだろう。

結

本論では、ソヴィエトの首都たるモスクワを改造する重要な国家コンペに参加した二人の外国人建築家、マイヤーとマイの取り組みを、図面分析とそのコンセプトから明らかにした。

両者は共に集合住宅設計という実務経験を有する建築家であったことから、実施可能であることを前提に、ソヴィエト政府のプログラムに準じた案を提出した。マイヤーは交通軸線に沿った産業地区と居住地区の再配置、サテライト・ラヨンによる行政区分の再編、それに伴う健康的な生活を、マイは居住地区と産業地区をコンビナートと改称して複数のコンビナートのユニットをタイプ化し、交通軸線に沿ってそれを展開し、その全体像を都市集団と名付け、都市集団の3段階の発展を想定する案を提出した。

しかし両案はいずれも現実的ではないとされ、最終案を策定する過程でそれらは無効化された。このような措置と策定された総合プランに対して、マイは自身のコンセプトを応用する機会として有意義ではあったが、その結果には失望した。それに反してマイヤーは、西欧の知識では通じず意義ある経験であったと回顧し、総合プランは世界有数の進歩的な首都として適当であると見なした。

なぜ両者の案は無効化されたのか。現実的ではない、というソヴィエトの見解にも妥当性があることは上でも述べた。しかしこのコンペが文化革命期と重複し、ソヴィエト宮殿コンペが建築における方針の統一として機能していたことから、それとは異なる力学が働いているように思われる。これが今後の課題である。

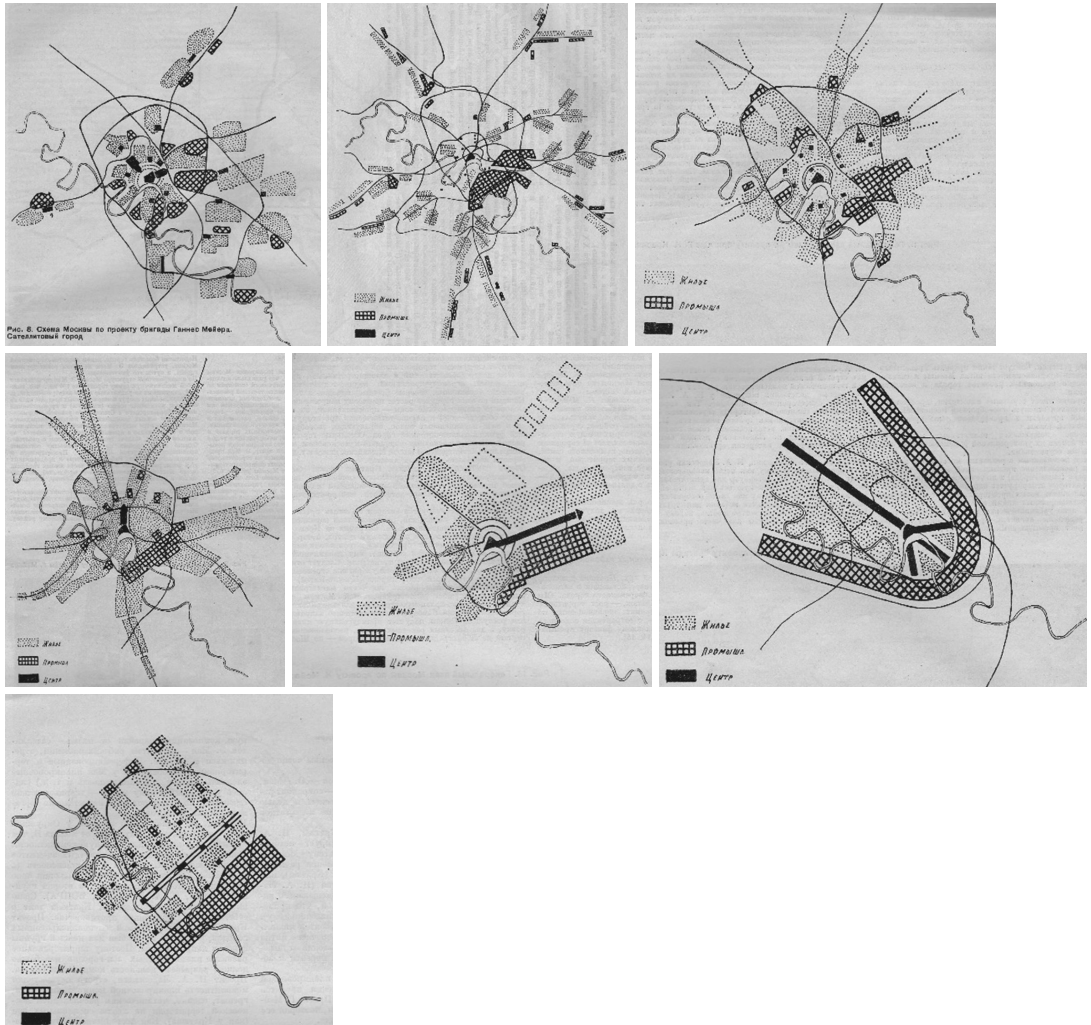


図1 (上左) : マイヤー案、(П. Гориденберг, Б. Гориденберг1933: 14)

図2 (上中) : マイ案 (同上: 12)

図3 (上右) : クルト・マイヤー案 (同上: 18)

図4 (中左) : クラーシン案 (同上: 16)

図5 (中中) : クラトユク班案 (同上: 20)

図6 (中右) : ラドフスキー案 (同上: 22)

図7 (下) : VOPRA案 (同上: 24)

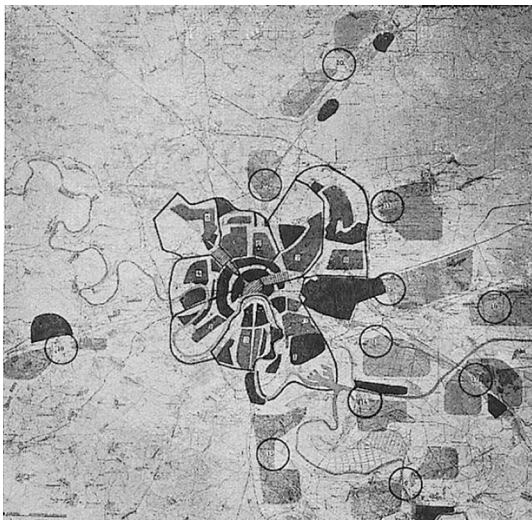
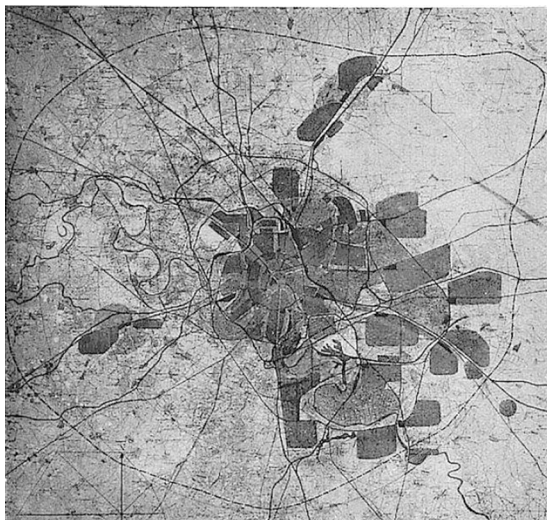


図8 (左) :マイヤー、ラヨン再編のシェーマ (J. Gantner1933: 226)

図9 (右) :マイヤー、大モスクワのための全体プラン (同上)

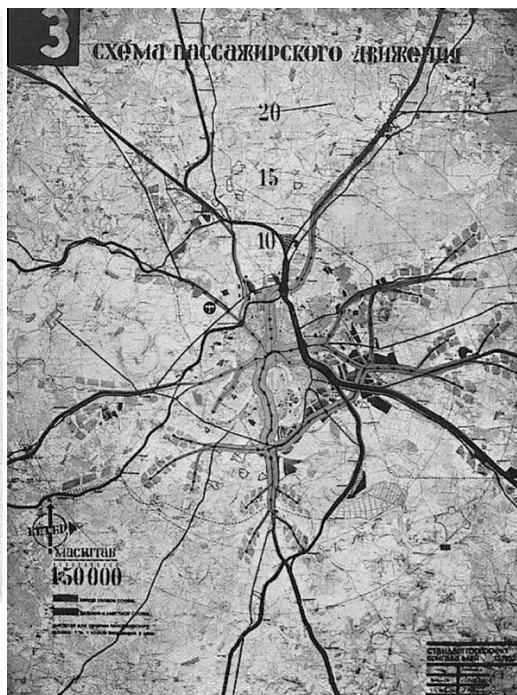
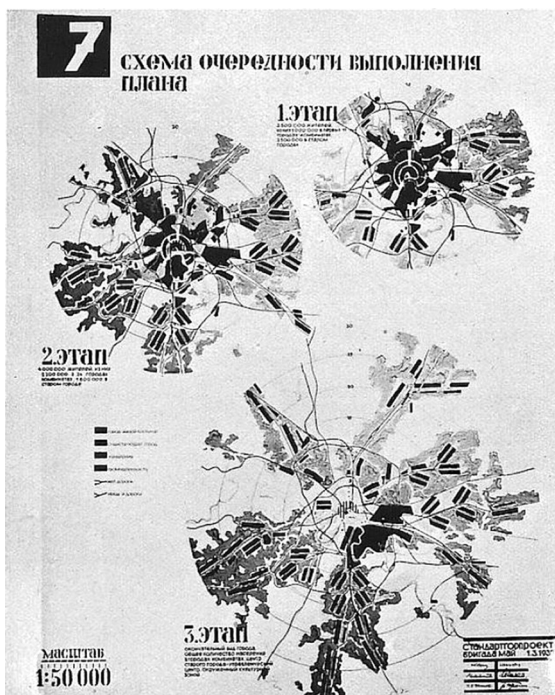


図10 (左) :マイ、モスクワ都市集団の三段階の拡張シェーマ (同上: S.224)

図11 (右) :マイ、都市集団における交通 (同上: 225)

参考文献

- 池田嘉郎「スターリンのモスクワ改造」、『年報都市史研究16：現代都市類型の創出』、都市史研究会編、山川出版社、2009年
- 「社会主義の都市アイデア」、『伝統都市<1>アイデア』、吉岡信之・伊藤毅編、東京大学出版会、2010年
- 岩澤龍彦「解題—設計者および生活造形者としてのマイヤー」、『生田哲学』第20号、75-88頁
- 「解題—マイヤーとドイツ建築界における住宅観」、『生田哲学』第21号、2019年、107-127頁
- 河村彩『ロシア構成主義：生活と造形の組織学』、共和国、2019年
- 後藤俊明「1920年代ドイツにおける社会的住宅建設の展開—フランクフルト・アム・マインの事例を中心に—」、『商学研究』、愛知学院大学商学会、第39巻第1号、1995年、pp.67-180
- 下斗米伸夫『スターリンと都市モスクワ—1931-34年—』岩波書店、1994年
- 鈴木佑也「機能的都市と社会主義都市—近代主義建築と全体主義期ソヴィエト建築の相互関係の導入として」、『アヴァンギャルドの知覚』、2017年、56-76頁
- 富田英夫「ハルネス・マイヤー「大モスクワ拡張・再建」設計競技案（1931-32）社会主義都市における心理効果」、『日本建築学会中国史部研究報告集』第31巻、2008年、913
- 本田晃子『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』、東京大学出版会、2014年
- Claude Schnaidt, "ÜBER DIE ERFAHRUNGEN IM STÄDTEBAU VON HANNES MEYER" in *ARCH+*, 6.Jg.(1974), H.24, S.20-25.
- Dietmar Neutats, "Zwischen Plaung und Chaos; Moskaus Aufstieg zur Megastadt des Sozialismus 1900-1940" in Wolfgang Schwentker (Hrsg.) *Megastädte im 20. Jahrhundert*, Vandenhoeck & Ruprecht, 2006, S.56-79.
- Dmitrij Chmelnizki, "Nikolaj Miljutins »Sozgorod« vor dem Hintergrund der sowjetischen Geschichte" in Nikolaj Miljutin(2018), iv-xv.
- Ernst May, "Biographische Notizen DKA, I, B-I"(???) in Thomas Flierl(Hrsg.), *Standardstädte; Ernst May in der Sowjetunion 1930-1933 Texte und Dokumente*, suhrkamp,S.127
- Ernst May, "Neuer Generalbebauungsplan für Groß-Moskau"(1932) in Thomas Flierl (Hrsg.)(2012). S.331-337
- Hannes Meyer: "Thesen über marxistische Architektur"(???) in Lena Mezer-Bergner(Hrsg.) Hannes Meyer, Bauen und Gesellschaft Schriften, Briefe, Projekte, Verlag der Kunst Dresden, 1980. S.97-99
- , "Entwicklungs- und Rekonstruktionsplan von Groß-Moskau (1931-1932)"(1938) in Lena Mezer-Bergner(Hrsg.) ebd. S.104-109.
- , "Erfahrungen im Städtebau" (1939) in Lena Mezer-Bergner(Hrsg.) ebd. S.213-224..
- Harald Bodenschatz, Thomas Flierl (Hg.), Von Adenauer zu Stalin: Der Einfluss des traditionellen deutschen Städtebaus in der Sowjetunion um 1935. Theater der Zeit, 2016.
- Harald Bodenschatz, Christiane Post (Hg.), *Städtebau im Schatten Stalins: Die internationale Suche nach der sozialistischen Stadt in der Sowjetunion 1929/1935*, Verlagshaus Braun, 2003.

Joseph Gantner, "Das Problem Groß-Moskau; Zu den Projekten der Brigaden Ernst May, Hannes Meyer und Kurt Meyer" in *Zeitschrift die neue stadt: internationale monatsschrift für architektonische planung und städtische kultur*, Heft 10, 1933, S.224-228

Klaus-Jürgen Winkler, "Über historische Wurzeln der marxistisch-leninistischen Architekturtheorie am Beispiel M. J. Ginsburg, N. A. Miljutin und H. Meyer" in *Architektur der DDR*, 31 Jg. (1982), H.6, S.357-360.

Nikolaj Miljutin, *Sozgorod und die Planung sozialistischer Städte*, DOM publishers, 2018(1930).

Philipp Tolziner. "Mit Hannes Meyer am Bauhaus und in der Sowjetunion (1927-1936)" in Werner Kleinerüschkamp (Redaktion), *architekt urbanist lehrer hannes meyer 1889-1954*, Wilhelm Ernst & Sohn, 1989. S.234-263.

Tatiana Efrussi, "Nach dem Ball. Die Bauhaus-Ausstellung in Moskau" in Thomas Flierl/Philipp Oswald (Hg.) *Hannes Meyer und das Bauhaus. Im Streit der Deutungen*. Spector Books. 2018. S.381-394.

Thomas Flierl, "Wohnungskooperative Socgorod und Neues Bauen in der Sowjetunion 1925-1932" in *ARCH+* 222, 2016, S.128-133

Николай Милютин, Пробрема стромельства социалистических городов, DOM publishers 2018(übersetzt von Heike Maria Johanning, herausgegeben von Dmitrij Chmelnizki; Nikolaj Miljutin, *Sozgorod und die Planung sozialistischer Städte*, DOM publishers, 2018).

П. Гориденберг, «Б. Гориденберг, Задачи социалистической реконструкции москвы» in *Советская архитектура*, 1(1933), С. 6-25.